
変われぬ世界

恭愁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変われぬ世界

【Nコード】

N8914A

【作者名】

恭愁

【あらすじ】

男らしい祥と女らしい和也。そして二人を出会わせた祥の祖父。
アキラ
普通なら出会わない二人が祖父のおかげで出会って…

私と祖父（前書き）

一応これはノンフィクションです。人物等の名前は若干かえていきます。

私と祖父

高校二年の春。

祖父が病院へ運ばれた。

幸い、怪我で済みその日のうちに帰ってこれた。

あまりにも出血がひどかったため、家族みんな慌てていたが本人はケロッとしていた。

祖父は私に口うるさい。

「女の子なんだから女の子らしくしなさい」
暇さえあればすぐ口にする台詞。正直聞き飽きた

祖父は好きだった。あたしの名前をつけたのは祖父だし、幼い頃から祖父と祖母に育てられた。

だけど女の子なんだからって台詞だけは嫌いだった。

祥でアキラ。正直男に付ける名前だろう。

案の定男らしく育ってしまった。見た目は女なのに性格は男らしい。だから今更女らしくなんてできない。

しかし祖父の怪我の事で意外な事実を知る事になった。

そう。祖父は病氣にかかっていた。

病名は白内障と緑内障。目の病氣とはやっかいだ。

そう。祖父は病氣にかかっていた。

病名は白内障と緑内障。目の病気とはやつかいだ。

私と祖父（後書き）

伝わりにくい話でしたが：これかも私たちは同じ世界に居ながら違う世界（視界）で生きていかなくてはなりません。それでも乗り越え分かってあげたいと思っています。読んでいただいてありがとうございます。

出会い

祖父は大きな眼科に通院した。右目が白内障、左目が緑内障。左目はすでに見えにくいと祖父は言っていた。

祖父はよく転ぶようになった。

そんな祖父を見て母がついに手術の話を持ちかけた。

祖父は手術しないと云っていたが実の娘である母に説得され、手術する事にした。

手術の日を決め、不安でいる私に知らない番号から電話があった。基本的に知らない番号は出ない。しかしあまりにもしつこかったので出てみた。

それが和也との出会いだった。

「あの：アキラさんの携帯でよろしいでしょうか？」

見覚えが無い声。

「誰ですかあ？」

と答える私に

「女の人？間違えました！」

と言い電話が切れた。

切られた理由はわかる。

アキラと言う名前で女って思う人は少ない。

しばらくするとまた連絡があった。また電話にでてみる。するとなぜか

「先程はすみません。アキラさんのお祖父さんに事情を聞きました。

」

と言われた。

祖父は病院のはず…？

意味も分からず戸惑っていると彼から説明があった。

祖父は病院の前で転んだので歩いて帰れないらしい。

動けないで座り込んでいる祖父を心配した彼がわざわざ私に連絡をくれたらしい。

状況が飲み込めたが私は車をもっていない。

結局祖父はタクシーで帰ってきた。

見知らぬ男性を連れて。私はすぐに

「どちら様ですか？」

と聞いた。予想はついている。

「命の恩人。お茶だして」

いや、祖父に聞いているわけじゃないんだけど…

祖母も祖父が見知らぬ男性を連れているのに驚いている。

話を聞くとやっぱり助けてくれた人だった。名前は和也。私の二個上。

なんだか不思議な感じの人だった。

私はすぐに

「どちら様ですか？」

と聞いた。予想はついている。

「命の恩人。お茶だして」

いや、祖父に聞いてるわけじゃないんだけど：

祖母も祖父が見知らぬ男性を連れているのに驚いている。

話を聞くとやっぱり助けてくれた人だった。名前は和也。私の二個上。

なんだか不思議な感じの人だった。

辛い現実

彼には何回か会話をシカトされた。祖父とは話して私にシカトって…
そう思い、むすつとして席を立つと彼は

「あれ？ 僕話聞き逃してました？」

なんだかむかつくなあ…私はシカトされた事に腹をたてていた為、

「ええ。お邪魔のようなので失礼します。」

といやみったらしく言った。しかし彼は

「僕左耳しか聞えないので聞き取れない時がたまにあります。すいません。」

はい？

確かにあたしの声は小さいけど…

え！？

理解するのに時間がかかった。

和也は幼い頃、右耳が聞えない事に気付いたが、左から話をされれば大丈夫らしい。

ただ、最近は左耳も聞えなくなっているみたいだ。

正直耳が聞えないのは見た目ではわからなかった。

確かに和也をよく見ていると耳が悪い。とは分かるはずだ。

しかし実際耳が聞えない人に出会うのは初めてだったし実感があまり浮かばない。

失礼な事したな…と後悔し

「何も知らないで嫌味をいってすみません。」
と言うと和也は

「慣れてますから。」

と笑顔で答えてくれた。

だけどその笑顔が私には余計辛かった。

慣れてると言うことは悪い事をしていないのに嫌味を言われたり避けられたり怒られたり。

そんな事があつたはずだ。

想像すると恐ろしい。

さらに和也は辛い話を続けた。

和也は左目がほとんど見えないらしい。

最近事故で左目をやられてしまい、片目で生活をしているみたいだ。

片耳、片目が不自由。

もはや想像すらできなくなった。

なぜかと言うともし自分が…

なんて思っても結局は私に不自由はない。

だからある程度軽く見てしまう。あるいはかなりの同情で大げさに見てしまう。

失われた希望

私の場合、まず最初に同情をしてしまった。次に自分に置き換えて考え、軽く…と言うより実感がわかなかった。

私の従兄も耳に障害をもっており、補聴器をつけている。でも普通に生活し、普通に働いている。

だからこそ偏見はなかったが、同情は抜けなかった。片耳ならまだしも片目まで失っている。

私には当たり前の聞き取るという事が和也には半分になっているし、同じく見える世界が半分になった。と言っても過言ではないだろう。

片目のせいで距離感が分からないときがあるそうだ。

和也はそれから祖父と友達になったらしい。

祖父の手術は成功した。

だがやはり片目だけ極度に見えにくいらしい。

やはり同じ立場の人の方が話があうのだろうか。

和也と祖父、従兄はよく家で話をしている。

祖父の楽しそうな顔を久々にみた。

だが、私と和也の距離は縮まらなかった。むしろ離れていったように思えた。祖父は和也の事を孫のように可愛がっていたし、従兄は和也と同じ年なため、昔からの親友のようだった。

和也の両親と私の両親もすぐに仲良くなった。

私は一人取り残された気分だった。

妹は和也をお兄ちゃんと呼んでいたし兄は和也を弟のように可愛がる。

私は一人ぼつんと輪の外で見ている事が多かった。

私は進路について甘く考えていた。そう思い、情けない気持ちだったから打ち解けられないのかもしれない。

昔から福祉関係の仕事をしたかった。

祖父の事がきっかけになり、絶対福祉関係の仕事につくと決めた。

だが、祖父や和也をみて私なんかは何ができる？

そう考えると何もできない。と思ってしまった。

勉強はしていた。祖父のしたい事を先に理解し、手伝う事くらいはできた。

きっかけ

そんな私を見ていた和也は私にこう言った

「よく人の事を見てるんだね。」

私は兄より兄らしく、友達にも頼られていた。

自分の事より人の事って性格だったし困ってる人はほっとけなかった。

だからその一言で私の事を認めてくれた気がしてうれしかった。

それからは和也と話す事も多くなりようやくお互いの事がわかった。

和也は昔から泣き虫だったらしい。今でもちょっとした事で泣いてしまふ。

悲しい事を考えるだけで泣いていたし可愛い女の子。そんなイメージだった。

女の子らしい性格の和也に男らしい性格のあたし。

お互い好きになるには時間がかからなかった。

憧れや尊敬もあるが私は和也自身が好きだった。

世間では女々しい男。だけど私はそんな和也だからこそ好きになった。

そして高3の春。

和也と出会って一年が経った。

そんなある日私は和也から告白された。

私の事を好きと言ってくれた。
だけど私はすぐに自分の気持ちを伝えられなかった。

本当に私でいいのか。

和也にはもっと自分を理解してくれる人の方がいいのではないか。
そんな事ばかり考えていて言葉を詰まらせていた。

そんな私を見た和也は

「傍にいてほしいのは祥だから。難しい事考えないで気持ちを聞かせて？」

私は久しぶりに泣いた。何年ぶりだろうか。

和也は私を支えて頭を撫でてくれた。

いつもとは立場が逆で。

その時は女の子らしい私と男らしい和也。

そんな状況だった。

これからの未来

もちろん断る理由がない。

確かに不安はあったけど素直に言えと言われたら：

好きで好きでしようがなかった。

和也のその一言で私はやっと自分の気持ちが伝えられた。

その後、私たちは付き合った。

親に反対されるわけもなく、祖父は本当の孫になると喜んでいた。私たちが付き合う事により、前よりもっと本当の家族のような感じになった。

そして和也はあたしの家に住む事になった。

和也の両親もよく遊びにきてくれていたし

私は和也のお母さんと二人で出かけたりもしていた。

和也には妹がいて、私の妹はお姉さん気取りだったり。

あの時和也と祖父が会っていなければ：

そう思うとちょっと怖い。

あれ以来和也の男らしい所を見てない。私も泣いていない。

相変わらず和也は可愛い女の子みたいだ。

今だにふと考えてしまう。

だけど和也に対する気持ちは変わらないし和也に出会えてよかったと思う。

来年の春、私と和也は結婚します。

最初はやっぱり大変だと思います。

だけど今後、色々な障害があっても和也と二人なら乗り越えられる
と思います。

和也の立場を変わってあげたい。同じ立場なら…そう思っても変わ
れません。

それにこの事を和也に言うと思われてしまいます。

だけど一緒に歩いて行く事はできるから。

一緒にこれから生きていけるから。

今隣にいる和也とずっとこれからも一緒に…

笑顔で過ごしたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8914a/>

変われぬ世界

2011年1月3日23時41分発行